

厚生労働科学研究費補助金
(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業 (健やか次世代育成総合研究事業))
分担研究報告書

「インクルーシブ教育を受ける思春期の難聴者の抱える問題」
に関する研究

研究分担者 片岡祐子 (岡山大学病院 耳鼻咽喉科 講師)
研究協力者 菅谷明子 (岡山大学病院 耳鼻咽喉科 助教)

研究要旨：

難聴児は、例え補聴器や人工内耳を装用し聴覚を用いてコミュニケーションを行っていても、聴取には限界があり、インクルーシブ教育を受ける上でコミュニケーション、学習、友人関係等で問題を抱えていることがこれまでの研究から明らかになった。難聴児を理解するための指導書はこれまでにいくつか出版、ホームページよりダウンロード等可能となっているが、簡便で分かり易い記載となっているとは言い難く、実際担当教師が難聴について適切に理解ができているとは考えにくい。今回我々は小・中・高校生の難聴児の学校生活の困難さについて調査を行い、「読み易く分かり易い」を主眼とした指導マニュアル「難聴をもつ小・中・高校生の学校生活で大切なこと」を1,000部作成した。既に全国20以上の医療機関、療育・教育機関、行政機関に配布し、非常に高い評価を得ている。今後、医療と療育、教育を繋ぐ、また難聴児の自分の障害や状況を学習する手段の一助となることに期待したい。

A. 研究目的

本研究の目的は、①新生児聴覚スクリーニング(NHS)でパスしたにもかかわらず乳幼児期に難聴が発見される遅発性難聴児の頻度、リスク因子を明らかにし、早期発見に繋げること、②聴覚を用いたコミュニケーションを行い、インクルーシブ教育を受ける児が学校生活で抱える聞き取りやコミュニケーション、学習、友人関係等で抱えている問題を明らかにし、対策に繋げることである。

上記①および②のデータは既に1年目、2年目で集計しており、最終年度はこれらをまとめ、論文文化すること、難聴児を担当する教師用のマニュアル作成を行うことを目標とした。

B. 研究方法

思春期の難聴児へスクリーニング的な調査および介入の実用性についての検証を目的に、当院および岡山かなりや学園を受診した乳幼児期から学童期早期発症の両側性難聴児、一側性難聴児・者(年齢は10歳から25歳)で小学校、中学校、高等学校で特に特別支援学校以外(インクルーシブ教育)に現在通学しているもしくは過去に通学していた例を対象とし、学校生活に関する質問紙

調査を行った。また、我々は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大予防対策としてのマスク着用等によるコミュニケーションの困難さの調査も実施している。これらの調査結果を集計し、問題点を明らかにした上で難聴児を担当する教師用の指導マニュアルを作成した。

(倫理面への配慮)

個人情報の特定が不可能な形式にすることを文書にて記載している。

岡山大学・研究倫理審査専門委員会にて個人情報の特定が不可能な形式にすることを文書にて記載している。(承認番号：研1908-053)

C. 研究結果

学校生活での困難さの調査は両側性難聴児89例、一側性難聴児対象27例が参加、COVID-19調査は269例が参加し、それぞれの結果の集計を行った。学校生活全般および授業、教科学習、友人関係の4項目に分類し、各項目における問題点、難聴児の意見、必要な配慮や対策について検討し、指導パンフレット「難聴をもつ小・中・高校生の学校生活で大切なこと」(全14ページ、図1)を作成した。

D. 考察

新生児聴覚スクリーニングによる先天性難聴の早期発見、早期療育開始、また人工内耳手術の低年齢化に伴い、難聴児・者（以下難聴児）の聴取能、言語発達は向上しており、近年支援学校ではなく地域の学校に通学しインクルーシブ教育を受ける難聴児は増加し、その割合は支援学級も含めると60%以上にのぼるとされている。しかし実際の教育現場においては聴覚補償でコミュニケーションの問題が完全に解消されているわけではなく、難聴児がインクルーシブ教育を受ける上で様々な課題が残っている。2019年6月、厚生労働省と文部科学省は共同で「難聴児の早期支援に向けた保健・医療・福祉・教育の連携プロジェクト報告」を発表し、その中で難聴の早期発見、早期療育開始だけでなく、学齢期後も継続的な支援、指導の必要性を強調している。教育者が適切な配慮や支援を行うためには、担任の教師は難聴や難聴児の聞こえに関しての知識が必要である。これまでに文部科学省より「聴覚障害教育の手引」全217ページ、日本学校保健会「難聴児童生徒へのきこえの支援」全51ページなどが出版、ホームページよりダウンロード等可能となっているが、簡便で分かり易い記載となっているとは言いが、実際担当教師が難聴について適切に理解ができていないとは考えにくい。まずアプローチしやすい指導書で理解へのハードルを下げるのが望ましいと考え、今回我々は小・中・高校生の難聴児の学校生活の困難さについて調査を行い、「読み易く分かり易い」を主眼とした指導マニュアル「難聴をもつ小・中・高校生の学校生活で大切なこと」を1,000部作成した。全国20以上の医療機関、療育・教育機関、行政機関に配布したが、「読み易い、分かり易い」と非常に高評価であり、多数の施設より追加送付が依頼され、既に900部以上が手元を離れている。本パンフレットは難聴児を担当する教師だけでなく難聴児やその保護者にも配布しているが、小・中・高校生もその場で興味を持ち読み始める例がほとんどであり、アプローチのしやすい説明書となっているという実感を得ている。医療と療育、教育を繋ぐ、また難聴児の自分の障害や状況を学習し、セルフアドボカシーを形成する手段の一助となることに期待したい。今後更に発展させられるよう啓蒙を継続させたい。

E. 結論

は小・中・高校生の難聴児の学校生活の困難さについて調査を行い、「読み易く分かり易い」を主眼とした指導マニュアル「難聴をもつ小・中・高校生の学校生活で大切なこと」を1,000部

作成した。医療機関、療育・教育機関、行政機関に配布し、高評価を得ている。今後、医療と療育、教育を繋ぐ、また難聴児の自分の障害や状況を学習する手段の一助となることに期待したい。

F. 研究発表

1. 論文発表
 - ① Kataoka Y, Maeda Y, Fukushima K, et al: Prevalence and risk factors for delayed-onset hearing loss in early childhood: A population-based observational study in Okayama Prefecture, Japan. *Int J Pediatr Otorhinolaryngol.* 2020 Nov;138:110298.
 - ② 片岡祐子, 菅谷明子, 中川敦子, 他: 両側難聴児・者が学校生活で抱える問題に関する調査の検討. *Audiology Japan* 2021; 64(1).
 - ③ 片岡祐子: 軽度・中等度難聴児への対応と課題 思春期に学校生活で抱える問題. *小児耳鼻咽喉科学会* 2021;42(1)
2. 学会発表
 - ① 片岡祐子. 思春期の難聴. 第121回日本耳鼻咽喉科学会学術講演会パネルディスカッション. 岡山. 2020
 - ② 片岡祐子, 前田幸英, 菅谷明子, 田中里実, 中川敦子, 假谷伸. 左右差のある両側難聴者に対するBiCROS補聴器装用経験. 第65回日本聴覚医学会総会・学術講演会. 名古屋. 2020.
 - ③ 片岡祐子. 新生児聴覚スクリーニングから人工内耳手術まで. 第30回日本耳科学会総会・学術講演会 パネルディスカッション. 福岡. 2020.
 - ④ 片岡祐子, 假谷伸, 菅谷明子. ワールドエンブレグ症候群小児7例の臨床像の検討. 第15回小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会, シンポジウム. 高知. 2020.
 - ⑤ 片岡祐子. 軽度～中等度難聴児への対応と課題思春期に学校生活で抱える問題. 第15回小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会, シンポジウム. 高知. 2020.
 - ⑥ 菅谷明子. 人工内耳装用児のピッチおよびプロソディーに関する研究. 第121回日本耳鼻咽喉科学会学術講演会. 岡山. 2020.

G. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

1. 特許取得
特記事項なし
2. 実用新案登録
特記事項なし
3. その他
特記事項なし

図1 教育者用パンフレット「難聴をもつ小・中・高校生の学校生活で大切なこと」

